



変形後の立脚点

立てなくなった場所が、立脚点になる。

人は、変わったあとに
どこへ進むかよりも先に、
どこに立てなくなったかを知る。

共鳴のあと、
以前と同じ位置には戻れなくなる。

それでも人は、
立たずにはいられない。

変形後の立脚点は、
新しい信念ではない。

考え直した答えでも、
整えられた正しさでもない。

むしろ、
以前のように立てなくなったあとに残る、
引き受け方に近い。

変形後の立脚点とは、
選び直した答えではない。

選び直せなかったまま残った、
姿勢のことである。

共鳴のあと、
価値は単純に並ばなくなる。

賛成と反対、
正解と間違い、
内と外。

そのどれにも、
完全には属せなくなる。

それでも人は、
何かに対して立つ。

沈黙として、
距離として、
あるいは、
判断を遅らせるという形で。

それは言葉ではなく、
先に態度として現れる。

変形したまま立つ人は、
分かりやしくない。

どちら側なのか、
何を信じているのか、
すぐには見えない。

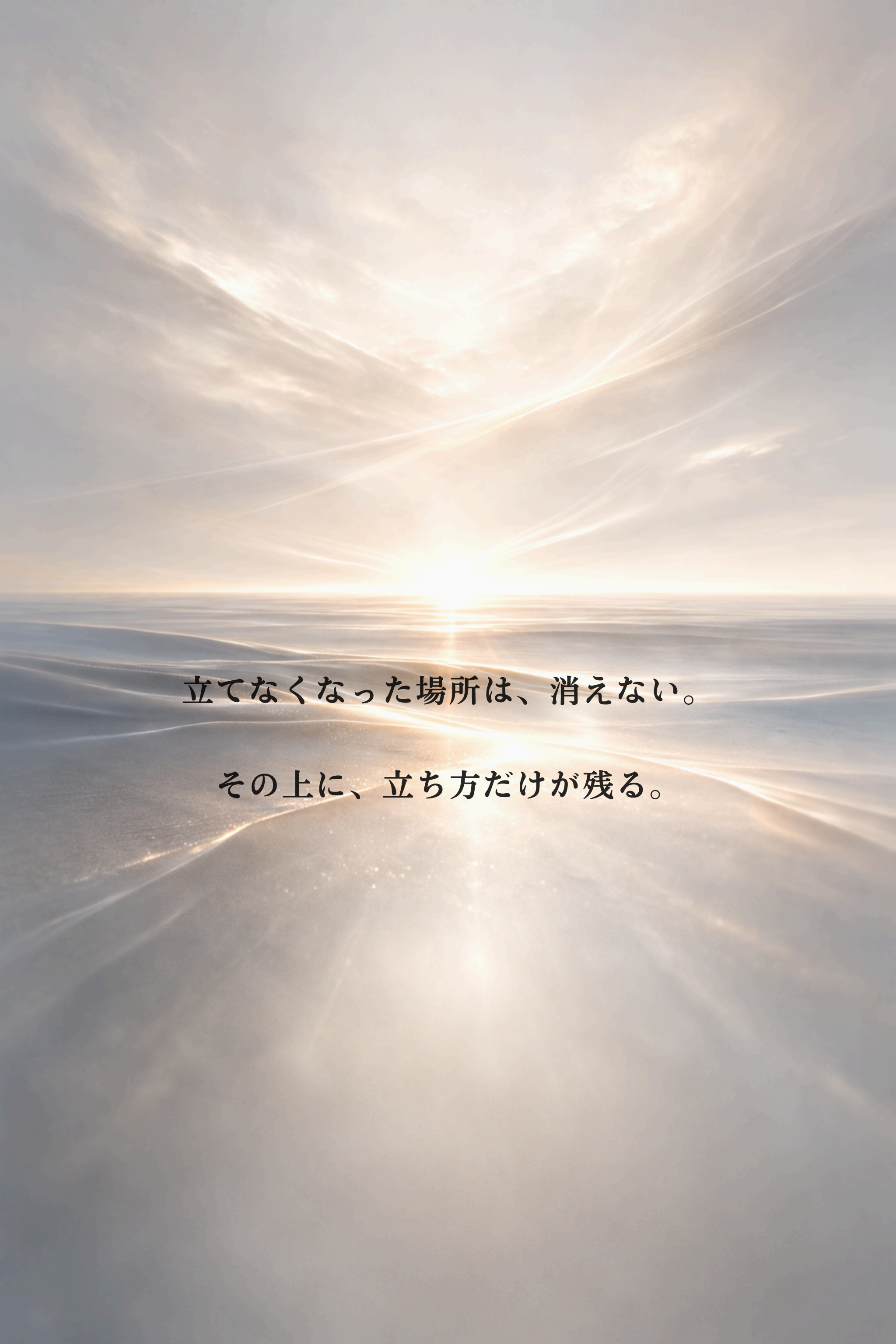
その曖昧さは、
逃避ではない。

複数の価値に触れてしまったあと、
雑に立つことを拒んだ痕跡である。

変形後の立脚点は、
孤独を伴う。

同時に、
誰かの価値を踏みつけずに済む位置でもある。

確かさを失ったぶん、
世界への接触は、
少しだけ静かになる。



立てなくなった場所は、消えない。

その上に、立ち方だけが残る。



Edition — 価値観の航路
別景：変形後の立脚点

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026